

2015.12.14

小原院長の“いま一番気になる人・仕事”スペシャル対談

岡本研作×小原忠士

平成2年の開院以来、25年間にわたり地元連島を中心に多くの住民の方から信頼を頂き、皆様の健康に貢献してきた小原整骨院。その小原院長が“いま一番気になる人・仕事”というテーマで、ゲストの方と対談をして頂きました。今回は、六代目酒津焼の窯元である岡本研作先生をお迎えし、酒津焼の魅力、陶芸の楽しみについて語り合っていました。
(2015年10月18日(日) 酒津焼工房にて)

「試行錯誤の繰り返し。…昨日までできなかったことが、急に今日できるようになることがあるんです。知らないうちに自分自身が進化している。そういうことに気づいた時は、夢中になりますね。何十年もやってきた今でもね。なので、日々の繰り返しは大切。いかに繰り返しが大事かということですね。」

ゲスト紹介

■ 岡本研作 (酒津焼六代目窯元)



1957年生まれ。初代岡本末吉(号陶楽)が1869年(明治2年)鶴形山の麓、戒町に開窯、倉敷新田灘の粘土を使用し、萩から陶工を呼び寄せ始めた酒津焼を現代に継承する六代目窯元。名古屋工業大学卒業、多治見市陶磁器意匠研究所にて研修後、昭和61年に全国陶芸展奨励賞を受賞、その後、全陶展や多くの展覧会に出展し、数々の賞を受賞。平成21年には「酒津焼開窯140年記念父子展」を開催するなど、匠の技を現代に伝えている。全陶展理事、全陶展審査委員、茶道裏千家倉敷支部副支部長。

■ 小原忠士（小原整骨院 院長）

1964年 倉敷市出身。地元である倉敷市連島で開院以来 25年にわたり地域の皆様の健康に貢献してきた小原整骨院の院長。柔道整復師としての技術力は当然、その穏やかな人柄で多くの患者に慕われ、スタッフからの信頼も厚い。2014年6月には株式会社エミリンクとして法人設立。代表取締役となる。



■ 司会進行 俣野浩志（株式会社パッション）

1970年 岡山市出身。一般社団法人ウェブ解析士協会認定 初級ウェブ解析士。経営修士（MBA：香川大学大学院地域マネジメント研究科）。大学でマーケティングを学んだ後11年間印刷・デザイン業界に勤務。2009年に岡山県産業振興財団主催のベンチャー・ビジネスプランコンテストにて奨励賞を受賞。2013年大学院にて「住民主体の体験交流型プログラムが地域社会に与える影響についての考察」というテーマで、NPOのまちづくりを研究した。

焼き上がりへの期待感！素人の方は本当に楽しいと思います。窯出しが終わって自分の作品に直面するときなんて、ドキドキでしょう。それを体験した方は陶芸に惹き込まれてしまう方が多いですね、結構抜け出せない（笑）。

司会：今回は倉敷の伝統工芸品である酒津焼の六代目窯元、岡本研作先生をお迎えしています。まずは岡本さんとの出会いを教えてください。

小原：今から遡ること4年くらい前ですかね…宝塚の鍼灸の先生が倉敷に遊びに来られたときに、おもてなしとしてアイビススクエアの陶芸体験に一緒に行ったのが、陶芸にはまっていくキッカケだったんです。その時に触った土の感触が忘れられなくて…。また映画のワンシーンで、ロクロを回しながら恋人と語らうとても印象深いシーンがあるんです「ゴーストニューヨークの幻」、私の大好きな映画の一つなんですが、それを見た時、電動ロクロをまわしてみたいという思いが募っていったんです…。

色々陶芸教室を探したのですが、アイビーの教室、整骨院の近くの教室も電動ロクロを使わせてもらえる環境がなく、諦めかけてたところ、たまたま患者さんの一人が研作先生をご存知でして、紹介していただくことができました。すぐ連絡させていただき、伺ったその日に、来月からお願いしますと…速攻で申し込んだ気がします（笑）。

岡本：はい、小原さんからは突然連絡があり、お店に来ていただきました。小原さんの希望される木曜日は、当時教室は開いていませんでしたが、小原さんの熱意に押され、木曜日に

も開講することになりました。今では、次第に受講生も増え、現在6名のクラスになっていますね（笑）。小原さんは何かと新しいご縁やキッカケを作ってくださいるんですよね。

小原：そうでしたよね。すみません。わがままで教室を開いていただいて（笑）…。教室に通わせていただいて、ますます陶芸の楽しさにはまっていますよ。最近では自分の作品をプレゼントするようにもなりました。ちょっと恥ずかしいんですけど…。

ところで、私は酒津焼のシンプルなデザインで、実用的なところが一番の魅力だと思うのですが、プロから見て、酒津焼の魅力というか他の焼き物との違いを教えてください。



岡本：そうですね。他の陶芸との違いと申しますか、まず酒津焼には146年の歴史があります。酒津焼の創始者である初代岡本末吉が茶道が好きで、茶道具を作りたいというところから趣味が高じて酒津焼きを始めたんです。当時は阿智神社の戒町の鶴形山で始めた。初めは小ぢやな窯だったと聞いています。

酒津焼は今までに何度も隆盛があったんです。明治9年になって酒津に窯を移した。八幡山（高梁川の向こう。この時も登り窯）ここは粘土が良かったので…それがとれる麓でということ。戦後、昭和25年に現在のところへ移りました。その時に登り窯も作ったんです。酒津に作った頃から本格的に販売目的でも作り始めたんです。

酒津焼きの特徴は、実は釉薬、粘土はあまり特徴はないんですね。日常生活に使っていただけるように肉厚に作っていることと。釉薬を厚目にかけて、色に深みを出していることですね。

小原：そうなんですね。しかし酒津焼の深みのある色合いや模様なんかはとても綺麗で好きですが…。

岡本：確かにナマコみたいな模様はなかなか他では少ないと思います。釉薬は自分で調合しています、自分の窯に合わせた調合をするためで…なのでやはり違いは出てきます。

小原：やはり、登り窯ならではの…というのはあるんですよね。

岡本：ありますね。酒津焼きの青い色は登り窯でないと出せません。ナマコ柄は電気でも比較的に出せますが。ほとんどの色は最近の電気でもガスでも出せるんです。しかし、言葉では表現できないんですが、しっとりとした色合いなどは薪でないと出ないですね。なかなかわかりにくいんですが…。

それに釉薬のかけ方、組み合わせは自分で編み出すしかないんですよ。とりあえず考えられる組み合わせを全部やってみるなど…。根気がいらいますよ（笑）。

登り窯の温度調節などは経験値のみですね。昔は年に3、4回焚いていたんですが。今は年に1、2回。薪の消費量もかかりますし



ね。15万くらい。最近は、ほとんどバーナーで灯油を使う。酒津焼きは最初から薪で焚きます、だいたい2、3日は焚きますね。最近、住宅が増えてなかなかできにくくなって、バーナーを使う窯が増えましたね。

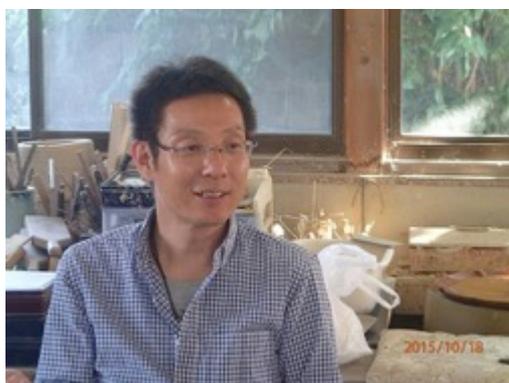
小原：そうですね。住宅地増えましたからね。だとすると研作先生の陶芸教室で学ぶのはとっても貴重な体験ができるわけですよね。自分の作品を登り窯で焼いてもらえるという。私も通わせていただいている陶芸教室ですが、女性が多いですよね。焼き物に興味を持つのは女性が多いんでしょうね。

岡本：そうでもないんですよ。焼き物が好きなのは40代以上の人がほとんど。男女比は半々くらいかな。陶芸教室に来られている方は女性が多いですね。教室の女性が多いのは単に女性の方が行動力があるからかもしれませんね（笑）。男性の方でもコレクターはいらっしゃいますし…。

陶芸教室以外でも体験もしているのですが、そちらは20代、30代の若い人が多い。ネットでしか募集をしてないからかもしれませんね。社員旅行や観光旅行に組み込んでもらったりもしていますよ。最近では、倉敷市が行っている「記念日をすごすまち倉敷」という観光プロジェクトに協賛していて、その中で体験をしてもらっています。結婚式の時に両親に花束を渡す代わりに自分たちで作った焼き物を渡すとか、両親の誕生日に渡すとか…3,000円から、いつでも受け付けているんですが、割に評判が良くて人気ですね。皆さん、土に触れるのは小学校の粘土細工以来という方が多いんですが、結構楽しんで行かれますよ。小原さんも通われて3年以上ですかね、土に触れるのがどんどん面白くなってきているでしょう。

小原：はい、そうなんです。最初は全然形にできなかつたんですけど、少しずつコツがつかめてくると、だんだん形になってきて…できることが増えてくると面白さが増してきますよね。それに自分の作品を使うことができるんで、愛着もわきますし。ちょっと暮らしの質が上がるような気がして…自分で作ったカップで飲んでいると、気が付いたら、しばらく眺めていますね、形はさておき…色や模様が綺麗で…（笑）。

岡本：ははは。酒津焼は電子レンジにかけても大丈夫ですよ。コンロで直火はダメなんですけどね。普段の生活でどんどん使っていただくと作り手としては嬉しいですね。酒津焼の特徴の一つは実用性ですから。気取りすぎない素朴なデザインで普段使いにも耐えられる焼き物なんです。



小原：それに土に触れていると心が落ち着きますよね。

岡本：土ひねりをしていると気分が落ち着く、癒しになる、集中できる、というのはよく言われますね。高齢者の福祉施設では「にぎり仏」をしているんです。思い込めながら土を握ってもらうんですが、癒されるよくと言われますね。土の感触とか匂いとかが良いんでしょうね。

小原：それと、焼き上がりへの期待感！

岡本：焼き上がりへの期待感！素人の方は本当に楽しいと思います。窯出しが終わって自分の作品に対面するときなんて、ドキドキでしょう。それを体験した方は陶芸に惹き込まれてしまう方が多いですね、結構抜け出せない（笑）。

私たちプロにとっては、焼き上がりは予想通りのこともあるし、そうでないこともあるし…予想以上は滅多にないので。期待感ではなく、真剣勝負！みたいところですね。登り窯は、結構貯まらないと焼けないんです、1,000点近く入るので。焼き上がりにこんな色や模様を出したいとすると、それに合わせて酸化や還元を調節するんです。登り窯の場合は中性炎、還元気味に焼きたいが酸化気味になることが多いんです。ナマコ柄は還元気味に焼いたほうが綺麗にできますね。

小原：そうなんですね。僕は単に自分の作品を焼いてもらうだけなので…。真剣勝負ですか！プロの世界の厳しさが少し垣間見れました。

プロの世界ということで、研作先生は陶工の家系に生まれてこられたわけですが、この道を目指すにあたって、思い入れとか、逆に他の道を目指したいとか…そういう気持ちはなかったですか？



岡本：やりたいことは色々ありましたが、生まれたときから決まっているようなものだったので、この世界に入ることに違和感はなかったですね。大学を出て入ったんですが、それまでは全く窯業に接することはなかったんです。といいますか、それまでは気軽に入れるような雰囲気ではなかったんです。父の仕事場には入りにくい雰囲気があったんです。やはりプロの…匠の世界というか…。それで大学を卒業してから本格的に始めたのは。最初は多治見陶磁器意匠研究所に1年くらい行っていたんですが、父の調子が悪くなったりしたので…それから父に着いて学び始めました。厳しくはなかったですが「取っ手」についてはうるさく指導されましたね。作って翌日にはなかったこともありましたが、40くらい作ったんですが、取っ手だけ取られていたんですよ。作り直せということだった（笑）。他にはあまり厳しく言われず、自由に作らせてもらいましたね。

小原：研作先生はどのような思いで作品を作られることが多いのですか。

岡本：「生活に潤いを与えて、心に安らぎを与えるような、そんなものを作っていきたい」と常に思っています。たまにですが「40年前に買った番茶のセットが欠けたので、これと同じものがないですか？」と電話がかかってくることもあるんです。それを聞くと、「ああ、大切に使ってくれているんだなあ」って…陶芸をやっていて本当に嬉しいと感じるときですよ。ただ全く同じものはないので、似たようなものをお分けするようにしています。同じものはまずできないので。

それと最近ですが、「あなたの作品はおおらかですね」と言われたんですね。これは嬉しかった！やはり同じ酒津焼であっても、祖父と父、私と弟では作風は違います。祖父は細工物が得意で好きでしたが、父は数をこなした職人として、ぴっちりとした形のものが多かった。私のはよく「おおらか」と言われます。弟の和明はまた違うと思いますよ。手の形や引き上げの方が一人ひとり個性があるので、同じぐい呑を作ってもそれはわかる。癖が出るんですよ。ここまでのことは周りの人はわからないと思いますよ。

小原：やはり、かなり深い世界ですね。研作先生の域に達しても、やはり日々精進だと思うのですが、それを追い求める気概というか…芸術の世界にはゴールはないですよね。ほんと、終わりのない「道」をひたすら歩いていくようなイメージなんですけど…。

岡本：おっしゃられる通り、ゴールはないですね。自分自身がその時は良いと思った作品でも、今見るとなんだ？と思うのはしょっちゅうですよ。最近、茶碗が良い色合いでできたんです。形はいまいちだが…。でも後で見ると変わって見えるんです。形も色も進化してきている。世間の流行というか焼き物の業界の中での流れもあるし、自分の意識が変わってきていることもあります。

釉薬に関しては、ちょっとずつ自分で繰り返して良い具合を作っていくんです。釉薬は調合とかけ方、焼き方（温度）、試行錯誤の連続。これはコツコツと試して経験するしかない。

形に関しては、自分が作りたいと思う形は思った時点でどうにかしたらできると思っています。なので、あとは試行錯誤の繰り返し。私の場合、作りながら形を決めていくことはまずないんですね。頭の中で形を作っておいてから取り掛かります。形にはインスピレーションもあるかもしれないが、昨日までできなかったことが、急に今日できるようなことがあるんです。知らないうちに自分自身が進化している。そういうことに気づいた時は、夢中になりますね。何十年もやってきた今でもね。なので、日々の繰り返しは大切。いかに繰り返しが大事かということですね。

小原：なるほど。インスピレーションを感じるためにしていることなどはありますか？

岡本：いろんなものから影響は受けますね。普段の生活の中から、街の景色、壁や柱のデザインなど、日常の生活の中で面白いと思うものを焼き物に生かしています。パッと見たときの印象で、このラインは美しいと思ったことから…最近では、羽や翼のようなものからインスピレーションを感じて、電球のカバーとして作ったりもしましたね。壁掛けなども作りますよ、富士山をデフォルメしたりして。

小原：そういった日々の暮らしの何気ないモノからインスピレーションを感じるには、感度が高くないといけませんね。

岡本：感度を高めるにはどうすれば良いと言われても…はっきりとこれが！というのは分かりませんが、いろんなモノに興味・関心を持つことは大切ですし、自分が知らない世界に触れてみることも良いと思います。私も茶道と書道を習っています。「道」と名のつく芸事や武術に触れることは、禅からの影響を受けているからかもしれませんが、その習熟過程の中で人格を磨くことができます。昨今は、そういう習い事などが見直されている風潮もありますし…どんな物でもよいのでこれは！と思う物があつたら飛び込めばよいのではないのでしょうか。



小原：いやあ、それはよくわかります！研作先生、よくぞおっしゃってくださいました！私も、いろんなことに首を突っ込みすぎ！とスタッフや周りの人から言われるくらい、興味の対象が多くて…。今、研作先生と一緒に、かな書道も習っていますが、本当に面白いですよね。日本古来からある習い事は、その世界に触れる機会

株式会社エミリンク（小原整骨院）

Copyright (c) 2014 Emilink.Co.,Ltd. All Rights Reserved.

を持つことはお勧めです！人生の一時期でも良いので…。

岡本：そうですね。かな書道の先生とのコラボ作品もさせていただきましたしね。いろんな刺激を頂いていますね。

小原：そうですね。しかし、研作先生という有名な陶芸家が、他の習い事ではお弟子さんとなって、素人の方と机を並べて習っているという…。その謙虚さというか、真面目さというか、研作先生のお人柄に惚れ惚れします。ところで、研作先生はお弟子さんを取られているのですか？

岡本：いえ、お弟子さんはお断りしています。陶芸家として生きるには、現代は生やさしい時代ではないんですよ。弟子を取るつもりは今の所ないですね。何年かに一回はなりたいたいという方が来てくれるのですが…本当に難しい。よほど才能がないと難しいと思いますよ。楽しむ程度が良いのでは…。なんだか厳しい話ですけど…。

小原：逆に言うと生半可な気持ちでは、ダメだということですね。「どうしても好きで仕方がない！」という、熱くほとぼしるほどの情熱を持っていないと…。

岡本：まあまあ、本当に厳しい世界ですよ。コツコツ続けることができるか…瞬間だけ熱くなってもダメですよ。心の奥底で、絶対消えない炎を持っているかどうか、かな。それと自己研鑽の意欲。やはり「道」に通じるものがありますから、ゴールがないんですよ。自分がこれでOKって思ってしまったら、そこからの成長がないので興味が半減するんですよ。それではダメで…。まだまだできることがあるんじゃないか？同じものを何度もなんども作って完成度を高めたり、何日もアイデアを抱え込んで、形になるまで新しいチャレンジをしたり…。そういう創作するときの産みの苦しみみたいなコトを楽しめる人は向いているかな。



小原：そうなんですね！陶芸教室はむちゃくちゃ楽しんですけれどね…わかりました(笑)。今日は長時間、ありがとうございました！またFMぐらしきの「気まぐれ！メンズトーク」でもお願いしますね！FMではもっとプライベートのことも伺いますので！

岡本：えっ、それは勘弁してほしいなあ…。あまり期待しないでください(笑)。今日は、ありがとうございました。楽しかったです！

.....

■ 酒津焼店舗（工房）
岡山県倉敷市酒津 2827

TEL : 086-422-1962 FAX : 086-422-1962

定休日：なし 営業時間：10：00～18：00

※時間外でも都合が合えば店を開くことが出来ますのでお問い合わせ下さい。

駐車場：あり

ご購入、お問い合わせについて

作品購入などのご質問がございましたら、店舗へ電話・ファックス・メールのいずれでも結構ですのでお問い合わせください。

■ 小原整骨院（本院）

〒712-8014 倉敷市連島中央 2-3-22 TEL&FAX : 086-444-9595

受付時間

受付時間	月	火	水	木	金	土	日
8:00～13:00	○	○	○	○	○	○	×
15:00～19:15	○	○	○	×	○	×	×

こはら鍼灸整骨院（倉敷分院）

〒710-0003 倉敷市平田 615-1 TEL : 086-486-3363